



藏粹作

明治卅四年三月二十日印刷

定價金拾五錢

明治卅四年四月三日發行

東京市麹町區上六番町四十五番地

發行者作者

櫻 田 野 寛

東京市麹町區飯田町四丁目第一番地

印刷者

大 野 喜 六

東京市麹町區上六番町四十五番地

發行所

東京新詩社

目

次

清 春 行 相 日 わ 泣 殘 長 破 山 敗

本
を
去
る
つ
ら
と
話

く

狂 思 春 思 歌 ひ す 照 醉 笛 薙 荷

(短
詩)

(短
詩)

むらさき

與謝野鐵幹著

清狂

○

われ男の子意氣の子名の子つるぎの子詩の子
戀の子あゝもだえの子

をのこわれ百世もよの後に消えのちば消へむ罵る子ら
よこころみじかき

○

夢は戀にあもひは國に身は塵にさても二十はたと
せさびしさを云はず

○

情なさけすぎて戀みなもろく才さいあまりて歌みな奇な
り我をあはれめ

○

親はありきむかし一人ひとりの親はありき百合そのの園

生ふにふとはぐれたり

○

よき音ねろの簞籠うぐいすかごのせばきにもいきどほろしき
我世となりぬ

○

そや理想りきさうこや運命うんめいの別路りつに白きすみれをあ
はれと泣く身

○

酒をあげて地に問ふ誰か悲歌ひかの友ぞ二十萬年
この酒冷にぬ

○ 紫の紅あけの萌黃もえぎのみづいろの緑はさまざま花は
眞白さ

○ 新しき冠かむりたまはり人を載せて西七百里蘇州そしゅうへ
わたる

○ みかはしてさしうつぶきてふくむ酒さても冷
えたりあれや別れの

○

○

○

わかれてはまたちる花にかごと云はずあわた
だしくも水を南へ

○
雲を見ず生駒いこま葛城かつらぎただ青きこの日なにとか人
を咀のろはむ

○
蘭を手てに麻あのまごろも竹たけの笠かさわかきひじりを
紀きの山やまに見る

○
時に瘦うせて戀こひなきすくせさても似にたり年としはわ

れより四つしたの友　（泣菫君と話す）

○

ればしまに柳しづれて雨ほろし酔ひたる人と
京の山見る

○

手をたまへ梨の花ちる川づたひ夕の虹にまぎ
れていなむ

○

われにろひて紅梅さける京の山にあしたあり
つ神うつくしき

みだれ髪にかざしは青き松の若葉しろき裳裾いすそ
は水にひたりぬ

○

鎌倉はちさくはかなき夢の跡よまた頼朝の脊せ
を拊うちつな君（林外、碎雨、蝶郎諸君と鎌倉に遊びて）

○

竹に染めし人の繪の具はうすかりき嵯峨の入
日はさて寒かりき

○

野のゆふべ花つむわれに歌強ひてただ『紫』と御み

名つげましぬ

○

白き羽^はの鶴のひとむら先づ過ぎぬ梅に夜^よゆく
神のおはすよ

○

われまどふこれかりそめかわれまどふ終にわ
りなの忘れがたなの

○

われいまだ云ひとく道をおもふまでに世をか
へりみる弱き子ならず

○

世に立たん榮はえよ力よ君によりて今日わが得たるうつくしき鞭

○

みなさけに涙こぼれぬさらば我師この子としへ酔へりどもぼせ

○

扶けのせて柳かざしてうつくしき手綱の御手にろど口ふれぬ

○

老の眼に涙たたへてさはいへど戀は悔ゆなど
あなかたじけな

○

戀といふも未だつくさず人と我とあたらしく
しぬ日の本の歌

○

そのあした紅あけの袖口裂きし子を人はねたまて
あはれと泣きぬ

○

世の常のそしりもつ子に今日なりぬるにしの

神の袖うらみあり

○

母にそひてはじめて董わが摘みしついで繁土ふりた
り岡崎の里

○

師の君の御袖によりて笑むは誰たぞ興津たきつの春の
雪うつくしき

○

うしろよりさぬきせまつる春の宵ろぞろや髪
の亂れて落ちぬ

○
五つとせをむつまじかりし友のわかれ城のひ
がしに春の雪踏む

○
見かはしてふたり伏^{そめ}目の人わかし梅にゆづれ
る車と車

○
友ひとり兄と仰ぐに君ひとり戀とたのむに我
は幸^{さいち}の子

○

ろの花よ清きにもろきすくせありてふと夕ぐ
れの小雨にちりぬ

○

宮島の神のとびらに歌も染めず筑紫へゆくを
人のなげきし

○

旅にねてすくせ相似しものがたり『親もあらぬ
子誰によるべき』

○

遠き人をふたりしのびしおばしまのろの春の